

文化高知 49

交通基盤整備への想い

岸本 宇根

昭和六十二年十一月十日に大阪市内で開催された全国バス事業者大会において、厳しい経営環境の中で地域の足の確保に努めるバスを国民の皆様に見直して頂くことを趣旨として、「バスの日」を制定することとなった。

その日を「九月二十日」と定めたのは、我が国で初めてバス事業が京都市で開業された明治三十六年九月二十日に因んだ。

以来毎年バス事業者は全国一斉に「バスの日」に相応しい行事を行ってきた。

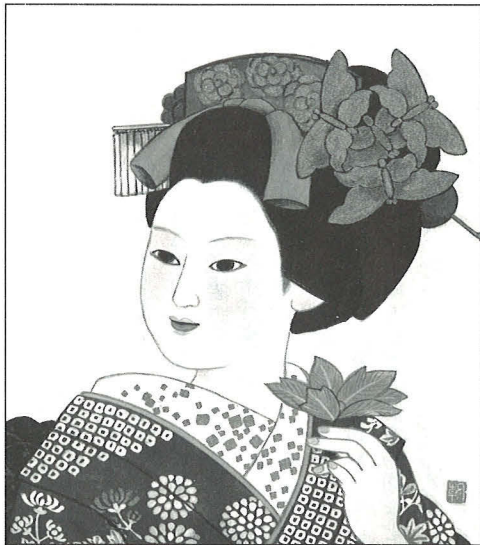
本県では、長距離高速バスの「高知〜大阪」線を新規開設した直後の平成二年から、高速バスの予備車を使って体験試乗会を実施し、今年も引き続き第三回目を行うこととした。

長距離高速バス・都市間高速バスは、ご利用者の好評を頂き安定成長しつつあり、今後とも安全運行の確保に徹しサービス向上に努めて参りたい。

バス利用者の利便を増大し、更にバス需要を喚起するには、バスターミナル施設を各所に整備することが不可欠であるのだが、いまのバス企業では独力で設置する術はなく、都市開発計画、

バス利用者の利便を増大し、更にバス需要を喚起するには、バスターミナル施設を各所に整備することが不可欠であるのだが、いまのバス企業では独力で設置する術はなく、都市開発計画、

バスターミナルの重要性を再認識しているのは、それがバス出入



「舞子」 前田 朝子

路・乗降場等のスペース確保やバス運行案内・予約発券センター・バス運行情報システムを備えたバス総合サービスセンター等本来の機能を設置するだけでなく、文化ホール・スポーツセンター、ショッピングセンター等を併設し、郵便局、市役所のような行政窓口も置く等、観光レジャー情報や生活情報の発信拠点機能を集中した高度多機能施設を形成することで、地域振興に大きな役割を果たし得るからである。

交通基盤整備事業等公的な手立てと完全にリンクさせて実施して頂くしかない。

このところ高知市でも漸く本格的な都市再開発計画等が活発な議論を呼ん

バス交通施設と文化の開花で社会に大いに寄与する明日を楽しく待ちたい。

(社団法人高知県バス協会長)

わたしの「土佐」と「高知」

武井 優

東京にいて「高知県」のことを、私はそう呼んだことがないような気がする。いつも「土佐」と言う。それが同一の地であるとしても、遠隔の地で営為を織りなせば、歳月が街の姿や装いをかえるように、人をも、もう一人の「私」にかえる。

林美美子は『放浪記』の冒頭で、「恋しや故郷、懐かしき父母」と、「故郷」の歌を記しているが、私の郷愁も幼き日の「現在」が息づく父や母のいたあの頃にしか、募らない。父も母もすでに鬼籍に入った。人は豊潤な心に満たされた、遠い思い出のなかの人々によって励まされ、勇気づけられる。

稲刈りが近づく頃のあの景色も忘れられない。一面に広がる稲田に黄金色の稲穂が実を結ぶと、見渡す限りの世界は、大地から焚きこめられた黄金の炎がもうもうと立ち昇るかのように、草や木や山をも、荘厳な色彩に染めあげた。抜けるような青淡の空に映える、

その力強い、自然の美しさが蘇ってくるたび、どれほど波打つ心奥の惑い、苦汁を拭拭されてきたことか。故郷を離れて二十四年が経つ。思い出に生かされる。

作家の宮地佐一郎さんは、会うときまわって「私も脱藩組やけん、お前さまもよのう」と、言われる。私の出立は、脱藩というより出奔に近い。が、いずれにせよそれを口にするのは気恥ずかしい。ただ、「脱藩」を耳にするたび、後輩に透明な太い綱をやりわりと投げかけてくれる先輩のやり、心遣いを感じるの、私の一人よがりであろうか。

古い言葉をつかわなければ気が済まない者同士、胸の内には、生まれた土地を背にする自由と孤立の戦いの激しい「生」がある。冷たさをまとわなければ生きられない、哀しい心情が漂う。

「土佐」の中にしか私の故郷はない。「高知」は異郷である。だが、「高知」の嘲笑めいた話を



聞けば、不愉快になる。この県の、本の売れゆき、学力、進学率の低さは全国でも名高いそうだ。トップは言わずもがな、酒量だとわかる。

昔から正月、盆、暮れ、お大師様、氏神様と年中行事にはさまれて、河原弁当、田植え、稲刈り、桜、つじ：といった季節を愛でる宴が張られた。ほとんど一年中、何かにつけ呑む機会は続く。本を読む時間などどこにある。売れるはずもない。

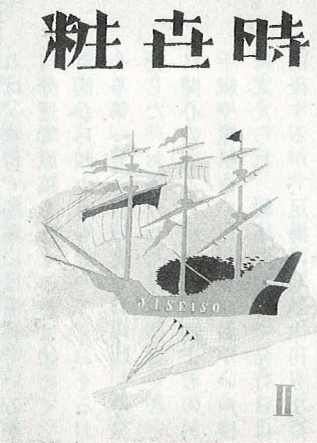
確かに人の気配が希薄な都会では、仕事に追われ、友人に会う機会を逸すると、心の渇きを本に求めるといふ側面もある。都会は孤独人の溜り場となった。整った身なりとはうらはらに人は心の空洞をかかえ、無意識のうちに幻影となった連帯感や共同意識に憧れ希求する。人が恋しい。本は読まないより、読んだ方がいい。しかし、生きることの実感、本の中より人の中にある。

運動会だと言っては、遠くに住む息子や娘が赤ん坊を抱いて帰り、参

華版にすぎ、資金が続かなかったものか僅か八号でもって終刊になっているのは惜しい。

大學先生は、マラルメの詩五篇と散文詩「パイプ」を訳され、あの『月下の一群』の掉尾を、マラルメ詩で結んでいる程だが、そのマラルメが晩年、巴里で編輯したファションPR誌「流行通信」がある。大學先生は、そのPR誌を意識して、「時世粧」の編輯に当たったのであろう。私が、書かんとするのは、マラルメと大學先生とのPR誌の関連ではない。私には、手に余る研究分野である。実は、「時世粧」にまつわるエピソードを披露したいのだ。

大學先生の『秋黄昏』が昭和五十五年に発刊された。準備段階に、私の堀口著書一覽写真を口絵に使うことになり、出版の河出書房から高知の写真家吉川泰平君に撮影を依頼したのか、書齋にやって来た。被写体が書棚なので戸惑っている様子だった。そこで、私の好きな「時世粧」創刊号の妙齢和服姿の写真を彼に見せたところ、「あれえ、撮影の小林祐史という写真家が、僕のお師匠です」と食い入るが如くに見ていた。私も初に聞く師弟関係だが、と同時に、世間の狭さも感じたこと



両者に共通しているのは、芸術意識ただならぬ一徹者であることだ。普通なら近寄り難いのも、誠、事実である。
(詩人堀口大學著書収集)

堀口大學著書収集の薬味箱

千頭 将宏

人は奇妙に思うだろうが、私の場合、長年探求していた書物をようやく手に入れた喜びよりも、入手の偶然のチャンス・幸運を招いてくれた経路に見出す至福の時を持つ喜びの方が、はるかに大きい。

掌中にした書物は、その時から関心の外、眼に映るのは、未だ手にせぬ書物の群なのである。我ながら奇天烈なる存在であって書棚には見向きもせず、それ故、読書は論外の沙汰。増えるのみを一途に楽しみとしていた書物狂なのであるから。

六月初旬の真昼、とある新刊書店にて、詩人の堀内豊氏に出会った。君に、「文化高知」誌上へ、堀口収集のことを書かせたら、と申し入れてある……。夕方、帰宅してみると、一点も購入したことのない尾張旭市の古本屋から稀覯誌三十七点

のぼる在庫通知があつて、欣喜雀躍の興奮に囚われた。文献の在庫通知というのは余程でもない限り知らせてはくれないのである。

夜更、堀内氏に架電し、一気に喋りまくる。昼間、堀内さんにお会いせず原稿の件もなかったなら、未知の古本屋からの在庫通知もあり得なかつたでしょう。貴方が幸運の女神の微笑を誘って下さったのです……と。

収集のもう一つの喜びは、未知の方から、文献を送って下さることだ。文献一点に一人の友人が生れる。このことは、鎌倉市の名店街PR誌に書いたので省略する。

名店街PR誌と言えば、大學先生も、昭和九年から十三年にかけ、京都市の老舗PR誌を編輯している。大判全頁局紙使用の多色刷木版画をも入れた「時世粧」のことだが、豪

だ。

書影について、あと一つ触れておきたい。

『堀口大學全集』全十二巻が小澤書店より刊行になっている。各巻の口絵カラー書影は、やはり高知市在住の濱川博司氏が非常な情熱を傾けて撮影下さった。全集の巻頭には、詩人の折々の肖像写真が、濱谷浩氏の撮影によって飾られている。濱川博司の名は、濱谷浩の異名ではない。購読者は、まさか一地方の高知でもあって、全集が生誕したとは思わぬであろうから、取えて付記しておきたい。

生きて証としての自分史

西村多津子

六年前の昭和六十一年、大阪の自費出版センターからの薦めにより「自分史」への取り組みをすることになった。社内をみまわすと若者ばかりで、他のメンバーより少し年を経ている私が担当することになった。自分史は自分の生きてきた証を、そのまま自分の筆で書き残していただく。こんな働きかけをするのに、今までの会社名ではおかしいが「出版社ではないし」ということで、出版制作室の五文字をそのまま加えて出発した。それからの私たちは、おかげさまで学ぶことの多い、貴重な体験をさせてもらっている。

自分史いろいろ

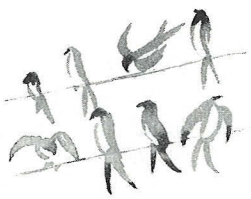
わざわざ自分史として書かなくても、短歌、俳句なども年代順に並べれば自分史であり、「平凡な人生だから書くことがない」といわれる方も、写真を前にして来し方を振り返ると、まさに歴史の語り部である。「それをそのまま書いてみてはどうですか」と助言させていただき、自分で筆を取られている方もある。

親孝行な息子さんは「父の遺品を整理していたら『まえがき』だけ書いた原稿が出てきたので、なんとかしてやりたいと思ひ、家族総出で書いてみました。孫達の文は、一人暮らしになったおばあちゃん宛ての手紙です」と言われる。

また、大正生まれのある方は、「父は、私が生まれたときから記述してくれ、嫁入りするときそのノットを持たせてくれました。父はマメな人で六人全部の子供にそうしたのです」と。

大正初期の生活はどんなであったろう。このお話を聞くと、何ものにもかえがたい宝物を残してくれたお父様もったこの方を、羨ましく思うのである。

明治生まれの香藤さんの土佐の童話『花子』は、自伝的童話として綴った。その一部に朝鮮人の少女「玉蘭」との交友が書かれている。今、幡多高校生ゼミナールが、朝鮮人強制連行聞き取り調査から出発した現代史を追跡するドキュメント映画



「渡り川」に取り組んでいる。香藤さんの実家を訪れ、玉蘭への想いを聞いた。八十三歳とは思えない記憶の鮮やかさに高校生達は胸を熱くし、調査の意義を深めている。

高知空襲展へは、毎年自分史コーナーを設けていただいている。昭和十年代以前の方の自分史には、戦争の記述は避けて通れない大きな出来事である。だからこそ文中には平和への祈りが込められている。今年はその会場へ「いま語り継がねばならぬこと」をお書きください」という標題で投稿用紙を置くことにした。戦中・戦後を生き抜いてこられた方には、どうしても風化させてはな

らない、また、二度と過ちを繰り返させてはならないという熱い想いがある。その気持ちを、戦争を知らない世代に伝えるためのお手伝いが出ればと、一人でも多くの方の投稿を願って……。

かわら版の発行

もう一つの大きな変化は、自分史

私の眼下には、もえるような緑とどっしりと力強い焦げ茶色の大地が広がっていた。ゆっくりと旋回して高度を下げてゆく飛行機の中から初めて見る北海道の大地に、これから出会えるだろう何かを予感して、期待に胸をふくらませていた。北海道と高知―まさに北と南。たった一人の青年の感動と熱い思いが、時空を超えて今一つの形になろうとしている。

六月十三日、朝からメイクと衣裳を整え、札幌駅で北海道初踊り。道行く人々は何事が起きたのかと、見たことのない団体にびっくり。足早に急ぐ人や不思議なものを見る様な目付きで眺める人、駅前はこちらとしたカルチャーショック。ペリーの来航ならぬ、よさこいの来道である。そんな北海道人をよそに、さっそく隊列を組んで「ヨイヤサッ」の掛け声。そしてポップなリズムに鳴子を響かせ、和調の法被を着た踊り子による迫力ある踊り、和洋うまく溶け合ったよさこい鳴子踊りの始まりである。始めは少なかつた観客も踊りが進むにつれて次第に多くなり、カメラの数も増えてきた。いつしかびっくりして大きく開いた眼も、ピットを刻むリズムとともに温かい優しい瞳になり、口元はよさこい節を

口ずさんでいた。こうして札幌駅を皮切りに幾つかの会場を踊り、メイン会場の大通公園へたどりついた。

さて、いよいよ「よさこいソーラン祭り」の開幕である。まずは、ジャズダンスのチームを先頭に会場を出発し、大通りをテレビ塔へと踊ってゆく。学生達の手づくりの山車を先頭に、ソーラン節をアレンジした音楽に乗って思いっきり鳴子を鳴らして踊る。みんなワクワクしていた。ドキドキしていた。山車の出来栄とか鳴子の持ち方とかは問題ではなかった。とにかく温かかった。みんな楽しそうに嬉しそうに踊る踊り子達。手づくりのぬくもりがあった。踊りを楽しむ純粋な笑顔が爽やかだった。

トリは私達である。鳴子を両肩に担いでスタンバイすると、「北海道にも若者の燃える祭りを」「忘れかけた開拓者精神を取り戻したい」という学生達の熱い思いと純粋な情熱がパワーとなって、地面から足の裏を伝わって私を踊らせた。激しい踊りでも百名全員一分の手抜きもなかった。とにかく踊った。理屈じゃなかった。ただ踊った。沿道の人達も人垣の中の限られたスペースで、できる限り体を動かし、一緒にリズムを刻み、そして歌った。

北と南が一つになった。年齢を越

作り方教室へ参加してくださった方から「自分でも書けそうな気分になってきたが、一人で書いていると怠慢になってくるので、たまには刺激を与えて欲しい。例えばニュースなど」と提案をいただいた。原稿があれば、割付、編集には慣れているが、自分達で原稿を書くことは始めてで、計画から四カ月も経って、おそろおそろ第一号「自分史かわら版」を発行した。お送りした方は、書くことに関心のある方が多く、励ましのお手紙や電話をいただき、温かい声援に支えられ、紺屋の白袴で発行日は前後するが、足掛け七年休刊もなく続いている。

以来原稿も早く引き受けていただき、自分達で発信できる喜びもでてきた。今では、標題も「かわら版」と改め、頁数も随分と増えている。

この二十年で、私たちの職場も随分変化があったが、仕事を通して社会のお役にたっているという自負と、すばらしい出会いが大きな財産となっている。

一人ひとりが自分史を書き、次の世代に継いでいくことができれば、これからの歴史は命を大事にする文化が継がれていくことになるのではないだろうか。

まさにロマンのある仕事である。

(四国写植出版制作室室長)

え、性別も出身もすべての垣根を越え、みんな一緒にワクワク、ドキドキ熱かった。一つの興奮とエネルギーを共有した。まさに「祭り」だった。

再び大通公園でのファイナル。各賞の発表、祭りを支えた裏方の学生達の紹介。そして、今度は本番のよさこいへ参加するという緊急重大発表。興奮は最高潮に達し、全チームの音がメドレーで流れる中、会場は全員参加の乱舞で埋め尽くされた。若者が完全に一つになった。

物心ついた頃から踊り続けたよさこい。毎年様々に変化し、オリジナルティー豊かに表現できるよさこい。よさこいは今、高知だけのものではなくなくなった。日本のものに、そしていつか世界のものになる日がくるかもしれない。その原点は、理屈ではなく、熱い思いと言葉を越えた魂のふれあいだと、大きい北海道は教えられた。

熱い思いだからこそできること、どんな困難も可能にする原動力。熱い思いを持つことが少なくなった今、よさこいは熱くなれる数少ない若者の祭りであり、私達の宝だと思ふ。

(スガジャズダンススタジオ
インストラクター)

若者の燃える祭りを

よさこいソーラン祭りに参加して

田村 千賀



酸っぱい思い出

浜田 容助

私と日曜市のふれ合いは、つぎの三つに分けられる。

まず昭和三十年代の高知大生の頃、黄色の菊の花に魅かれ「おんちゃん、この菊何ぼ?」、「うん二〇〇円」、「ちくとまからん」、「一八〇円かのう」、「一五〇円しかないき、一五〇円にしてくれん!」、「よっしゃ持っていき!」という会話が始まりである。

その後この売り買いコミュニケーションが楽しくて、嬉しくて、毎週通い始め、ついには約二〇〇鉢の植物を世話する大学生となってしまったのである。

次は昭和四十年代の野菜などの買い出しである。食堂をやる羽目になり、日曜市を西から東に六年間位歩いた。

「おばさんその大根いくら?」、「一本五〇円」、「のっそ(全部)で五〇〇円にならん?」、「持って行きや」の商談がそこでは生まれた。沢山の顔馴染みができ、「オマケよえ」と色々な物を頂いた。その頃の日曜市での陽にやけた顔に、あねさんかぶりの、福井、万々、円行寺のおばさんたち一人一人が懐かしい。

ところでさらなるふれ合いは、日曜市を舞台に、ラジオで平成元年から一年間放送した時に復活した。そのなかでは、日曜市で生活する色

んな人との語らいが生まれた。

西の端で、今、町の中で鶏を飼うと朝やかましいと言われるので、昔のように売れぬと言いなながらも鶏が好きやきやめれんと頑張っているトリ屋さん。遺失物の払下品を売っているモダンで愉快な実年御夫婦。暑い日も寒い日も地べたに腰を下ろし、最近力が弱ったので銅線であり籠などを作るようになったオジサン。自分で土佐の案内ガイドを吹き込み高知宣伝に励むイモけんび屋の奥さん。今は亡き、いつも誕生日の花のおじさん等々。

この人達のホンクで生きている姿が、土佐の日曜市を作り上げているのだなということをおぼされた。

そして今、日曜市は、四国高速道の開通により観光土産名所となり、昔のゆったりとした語らいは人混みに押されて不可能になってしまった。また午後三時を過ぎると売り切れ帰宅の光景が見られだした。今までも冬も夏も一生懸命ホンクで商売してきたんだもの、こういうことが偶にあってもいいと思はる。

だがその反面、いろんな南国高知の匂いが漂い、土佐弁が飛び交っていた、「フトイ」、「ヌクイ」人情一杯の日曜市が、高速道路化しているような面も見られだした。

中年の御婦人が大声で「財布をすられた!」と走り泣き叫んでいるのに、ただ人がぞろぞろ歩き、商売がそこで行われている風景が、その一つである。

こんな風景は、私の知っている日曜市には似つかわしくない気がする。

(高知放送 パーソナリティ)

きしているわけでもないのに見事に並んでいく。何か不思議な生き物を見ている気がする。この間、車の流れを邪魔しようがお構いなし。また邪魔された方も何とも思わない。至極当然といった顔。短気で乱暴と定評のある土佐のドライバーである。あとは女性、いやおばちゃん達の天下。次々訪れる人達相手に商売そっちのけで話し込む。また買い手も同様である。

「ねえおばちゃん」で始まる会話は、いつのまにか周囲を巻き込んで盛り上がる。その間をつなぐのはその時々季節の幸たちであり、おばちゃん達の手づくりの品々であり、土佐の開放的な風土であるかもしれない。

通りを一つかえれば現代的な「スーパー」があり、そのフロアには素材・加工品を問わず工業製品と言いたくなるパックに包まれた食品が並んでいる。野菜の持つ本来の味や香りは失われ、「臭い」と言う人すらいる。このままでは日本人の感性そのものが危ないと警鐘を鳴らす人もいる。年令を問わず忙しさに追われる毎日を送っている今、なぜ市がこれ程活気があるのだろうか。

目当ての物があっても、また無くて市へ足を運ぶ人々。かく云う私もその一人であるが、これは今、ともすれば忘れがちな心の余裕が市にはあるせいではないかと思う。押し付けがましいまでの高知の女性達のバイタリティーと、影すら感じさせない程の明るい開放感と、日常用品を扱っていながら一切日常性を感じさせないその日だけの市の持つ特性。市の主役は、実はそれらが混然とした市そのものなのかもしれない。(高知女子大調理学研究室勤務)

古時計の鳴る市

竹原 公子



戦後満州から引き揚げて来た私達一家六人は、父の生地である土佐市新居で一年間を過ごしたのち、高知市内の役知町へ落ち着いた。

敗戦による荒廃と混乱の中で身も心も寂寥としていたが、いち早く復興の萌しとして、日曜市が復活された。そして市は庶民の心を和ませ安らぎを与えたのである。

私は当時小学生であったが、日曜市が開かれている追手筋へはいつも歩いて行った。

市はご承知のとおり高知城の追手門より東へ一キロ、約七〇〇の店が立ち並び、朝早くから日没まで毎週日曜日に開かれ、その規模は大きく全国的に見ても高知のようなところはないと云われている。

例えば、市で売られる野菜は新鮮で安い。取ったばかりであるので朝の露が残っているものや、「なす」「きゅうり」などは艶があり、刺が違って手にさわると感触が得られる程、瑞々しい。庭石など時には売手と買手のかけ引きがあっ

市の主役たち

光明院智子



曜市と言えば、高知市内だけでも日曜市を筆頭にほとんど毎日どこかで立つ。場所も様々、人も様々。でも流れる雰囲気はどこでも同じだ。まるで違う種類の料理なのに、盛り付けてみれば不思議によく似る皿鉢料理のように。

主役たちは何といても売り手の女性たち。もちろん男性もいますが、少々影が薄く感じるのは私だけでしょうか。無造作に並べられた海の幸・山の幸たち。そこには色つやをよく見せる照明もなければ、鮮度を作為する薬剤入りの散水もない。本当に生の食物たちの誇らしげな顔と、作り手の喜びがあるだけ。店先に季節がなくなると言われて久しいが、ここにはその季節が「樂しげに」その存在を主張している。「樂しげに」、正にその言葉がびつたりくる場所もここならではないかと思う。今さっきまで車道だった溝だった所に、板を敷きポールをたてテントを張る。そして箱ごと品物を並べて一丁あがり。屋台的な物があるでなし、線引

て、日没前の閉店前に行って交渉しているのが時々見受けられ、日曜市ならでは見られない光景である。

追手門の近くには、よく「地鶏・チャボ」の直販で鶏が逃げないように大きな籠で伏せている。籠の外には優秀な品種であると折紙付の書付があり、人々の関心をさそっている。ところが突然雄の鶏の「コケッココ」と、時を知らず長い鳴き声にびつくりし、雌が路上に卵を生んで「コッコッコッコ」と報らせるユーモラスな情景を見る。

また古道具屋の前を通ると柱時計が「ポーン、ポーン」と路まで聞こえてくる。歳末にそれを聞きながら歩いていると、今年も終りかと感慨がひとしおである。

「古時計ポーン、ポーンと年惜しむ」

富安風生

このように日曜市には独自の雰囲気があり情緒があつて、ただ散策しても結構楽しい。何度も通っているうちに親しくなり、値引きをしてもらったり、余分に足してもらったりする。手塩にかけて育てた農作物や商品を、丁寧に紙に包んで客に手渡す様子は、時に娘を嫁がす母親のやさしさに似たものを感じるのである。

近來高速道路の開通で四国近県から一気に高知市へ来て、日曜市に立ち寄り買って帰る人も多くあると聞く。これからも市が栄えていくために今まで通り、新しい、安い、良い品々を売ってもらいたいものである。

日曜市を昔から愛する者の一人としての実感である。

(地方公務員)

動き出した戦後

奥田 精一

昭和は実質六十二年で終わった。終つてみればまことに短いようにも思われるが、質的にはかなり密度の濃い時代ではなかったかと思う。

歴史を検証するには不勉強だが、自分が生活し、自分なりに実感した時代はこの昭和に外ならないからである。しかし、考えてみるに私たちの多くは平凡な市井人として生活してきたにすぎず、他の人に対して「私の昭和」として応えうるものがあまりあるとは思えない。あつたとしてもまことに平凡極まりない日常の些事に過ぎない。その中から一つ二つ思い出すことを記してみたい。

終戦の詔勅はたまたま韓国と九州の中間の対馬の小学校の校庭で聴取することができた。その数日前、突如、軽爆撃機の襲撃があり、同機は被弾し海中に墜落した。その時私は乗っていた小艦も若干の人的・物的被害を出していたので、あまりに早い終戦にいささか戸惑いを感じたものである。それにしても、この小さな戦いで終戦を目前にして亡くなったパイロットも哀れであつた。

わが艦に対し、真正面から波しぶきをあげて撃ちこまれてくる弾道を思い浮かべると、今でもその日の光景をはつきりと脳裏に描き出すことができる。

戦争は終り、一旦、呉の港に帰ってきたが、僅かの期間とはいえ、親しんできた戦友たちにそのまま別れてしまうのも何か心残りがして、引き続きその艦で外地の日本人の引き揚げ業務に参加することにした。行く先はフィリピンのミンダナオ島であつた。幾日間の航海であつたが今は記憶も定かではないが、戦争の終つたあとの航海は平穩このうえもないものであつた。海亀が遊泳し、

椰子の実の流れてくる入江を暫く航行し、目的地のダバオに入港した。土地の者が小舟でバナナなどを売りに集まってきたが、買うことも、また、上陸することも許されない敗戦国の艦である。航海の疲れを熱帯の夕立と夜風で癒やし、翌日、引き揚げの子女多数を乗船させ直ちに帰航することになった。帰途、病に倒れた幼児を波静かな南海に一人遺し、沈みゆく樞に別れを告げてきたことも忘れられない思い出の一コマである。

引き揚げ船の仕事はその後何時まで続いたか知らないが、再度の出航時たまたま船の機関が故障し、やむを得ず宮崎沖から引き返すことになった。船乗になるつもりもなかったので、船長の言葉に従って船をおり焼土と化した東京で再び就学することになった。このようにして私の短い戦争の時代は終わった。

再就学し、暫く学生生活を送っていたが、季節はずれの九月に卒業することになり、縁あって高知市に勤めることになった。昭和二十三年頃のことである。当時はまだなんとなく混沌とした時代でもあり、別に大きな夢などもって入った訳でもないが、今から考えると当時の役所には、終戦でやむを得ず外地から引き揚げてこられた人もかなり居たようである。その人達は私たちに比べ相当の年配者であり、外地でも一角の仕事を担当していたであろうと推測された。それらの人達はいずれも間もなく重要なポストに就かれ、私もやがてその人達の輪の中でのいろいろの仕事を経験していただくことになった。今ではこうした人事の交流は中々考えられないことだが、刺激のある貴重な一つの時代であつたように思われる。

世の中も漸く活気を取り戻そうとしていた昭和三十一年の年に、高知市を診断し、その進むべき方向づけを決めるための総合調査が行われた。地元の高知大学、高知女子大学等の参加も得られ、都市学会近畿支部のお世話で関西の諸大学の先生方のご指導の下に高知市の都市診断を行うことになった。

会合は暑い夏休みを中心にして集中的に組みこまれ、鏡川河畔の競輪選手の宿舎がその場所としてあつた。この頃は冷房設備は勿論なく、あつても官公庁での使用など論外の時代であつたので、天井に回る大きな扇風機と時折の川風が唯一の息抜きの涼となつた。当時は先生方も新進気鋭の方々が多く、侃々諤々の日が続いたことも懐しく思い出される。

それにしても報告書によると、当時の人口推計は上限が二十三万人程度である。その後の人口の都市集中や、また爆発的に増大したモータリゼーションはまことに凄まじいものがあり、今から考えるとその変化と発展には驚きを禁じ得ない。

今再び市の診断を行うとすればどんな形のもので生まれるのだろうか。冷戦時代の急速な終焉が中々予測し得なかつたように、社会の進歩も中々明確には判断でき難いようである。最近報道されている県のシンクタンク・県政策総合研究所が、新しい時代の要請を逸早くキャッチし、時代に最適したマスタープランを作成されるようであるが、県の中核都市の診断もこの際行っていただけないものだろうか。

話は変わるが、老朽化した木造バ

ラック建て庁舎の改築は、二年後の昭和三十三年に行われている。

庁舎の改築は、当時としては他の市町村に比べかなり早かつたようである。



高知市制70年記念の「南国高知総合大博覧会」
～写真集 高知市・まちと人の100年より

現在のスタイルのものが出来上がったが、その竣工を記念し、「南国高知総合大博覧会」が企画された。私たちのグループは五階建て庁舎の一階フロアを受け

アを受け、専門家の指導・援助の下に足を棒にして駆けずり回り、オープンにやっ中間に合わせた、苦しい思い出をもっている。当時、県庁舎も改築プランが取り沙汰されていたが、私たちは、お城の景観保持やら、広場の有効活用が市民にとってよりベターなプランであるとして、県庁舎を移転し、その跡地を広場とした模型をつくり

ある。建築に必要な財源が先人の志により「山林」として蓄積されていたことも、その理由の一つであつたと思う。設計は大阪のN社が請け負

アピールしたが、プランは空しく、ご承知のように広場の予定地には厳として新しい庁舎が建ててしまった。博覧会といえは、市の資料によれば、昭和二十二年から四十一年までの間に四回程実施されている。ざつと計算して五年に一度の割合である。往時の人々のバイタリティーを思えば恐ろしい。世情の違いは勿論あるが、それにしても最近では、都市の過密化にともない、広場も空地もなくなつてしまひ、ゆとりのある催し物も出来難くなつてしまったのは情けない。それを思えば、私たちの当時のプランも案外捨てたものではないかと思ふことがある。

六十三年にわたつた昭和の時代は、何時の間にか幕を閉じた。しかし、その余音は、まだ私の耳に残っている。やがては消えてなくなるだろうが、ここに書いてきた幾つかのエピソードが私の昭和時代の記憶とすれば、随分と遠い昔のことに執着しているようにもみえる。老化の現象がひそかに近付いてきている先触れかも知れぬ。静かに平成の時代の繁栄を祈り筆を置くことにする。

(株)四国環境管理センター専務

高知の山と森 (三)

白髪山

西村 武二

本山町で吉野川と合流する清流、汗見川の支流奥白髪谷川の上流にヒノキの天然生林とシヤクナゲで知られた白髪山がある。前号の千本山が高知を代表するスギの美林ならば、白髪山はヒノキの代表である。千本山の巨木に圧倒される雰囲気にかわって、ここ白髪山では高木のヒノキ、ツガ、ヒメコマツと低木のシヤクナゲと落葉広葉樹の織りなす調和がある。とくに五月下旬から六月上旬にかけては、シヤクナゲの花の桃色と落葉樹の新緑と、針葉樹の深緑の組み合わせは見事である。

奥白髪谷の登山口のケヤキの人工林を抜け、沢筋の落葉広葉樹林に入り、何度か沢を渡るとヒノキ林に入る。すぐにシヤクナゲの回廊がはじまる。道の両側を満開のシヤクナゲが飾り、その間の木の根もあらわな段階を登る。頭上にはヒノキの天蓋、

まさに花道である。なんとも晴れがましく、面映ゆい感じがするものだ。一登りするとベンチがあり、その前にはヒノキとヒメコマツの太木それぞれ二本ずつが根を絡ませながらお互いを支えあい、もたれあい、根上がり状態となっている。周りは一面シヤクナゲの花、コケむした林床、左手には沢のせせらぎ、さえずり交わす野鳥たちの声、ここで一息入れない手はない。

登山道に沿って所々にヒノキの風倒木が目につく。その根鉢の深さは一メートルにも満たない。ヒノキの根が張れる深さはその樹高に比べてなんと浅いことか。この風倒が次の代の木の生長を促すのである。しかし林床には後継樹となるヒノキの若木があまり無く、より耐陰性のあるツガの若木ばかりが目につく。保護林としてこのまま手付かず置いて

おけば、いずれヒノキが枯れた後、高木になるのはツガしかない。白髪山ヒノキ林は将来ツガ林になってしまっただろう。白髪山のヒノキ林を維持するためにはヒノキを伐採し、林内を明るくしてヒノキの種子が発芽して稚樹、若木にまで生長するのを促してやらねばならない。それが藩政時代に行われていた天然更新の技術なのである。

木曾ヒノキで有名な長野県上松町の赤沢自然休養林でも、同様の事がみられる。ここではヒノキ林の林床にヒノキの稚樹にかわって、より耐陰性のあるアスナロの稚樹が優占している。上層のヒノキが枯ればヒノキ林はアスナロ林に変わってしまう。そのためここでは休養林の外でヒノキの伐採を行い、ヒノキの稚樹を発生させる実験が行われ、よい成果が得られていると聞く。

森林に全く手を加えずにそのまま置く自然保護の方法は、森林を遷移の進行のままに任せる場合を除けば、遷移の終点である極相林の場合だけに適用される。遷移途中相の森林をそのままの形で維持するにはなかなかの人手を加えなければならないのである。

ヒノキの立木の根元のコケや落葉の層をそと剥がすと、巨礫が堆積し、隙間だらけだ。ヒノキは岩の隙

方位を定めようとしても無駄だ。ここでは磁針は正確に南北をさしてくれない。露岩が磁性を持ち磁石を狂わせるのだ。

白髪山は幾たびも歴史に登場した。

間を埋めるわずかな土の中に健気にも根を下ろし、土を引き留めているのだ。いったい、この山は岩石の瓦礫の山なのか。その表面を落葉枝やコケや土壌が薄く被っているのか。長年の侵食の結果こうなったのであるか。いずれにしても土壌層は大変貧弱である。普通ならばこの山ぐらゐの標高の所ではブナ林が成立するのであるが、土地的な条件によって、さらに藩政時代の施業によってヒノキが優占する森林となっている。さらに登り続けると平坦地に至る。ここには根鉢の直径が四〜五メートルにも達する大きなヒノキの倒木がある。このあたり特に風当りが強いのか、尾根筋には東側に傾いた木が多い。地図を見るとここは鞍部になっている。風が収束するため特に風圧の強まる所なのだろう。

やがて大岩の下、四角に石積みした広さ六畳足らずの小屋跡があり、ここから再び登りとなるが、すぐ平坦となり頂上に至る。

頂上の南側は露岩の急斜面となり行川側に落ち込んでいる。頂上周辺は風下側に枝をなびかせた立ち枯れのヒノキやコマツガのオブジェ、白骨林が特異な景観を見せる。シヤクナゲがその裾を飾っている。眼下の吉野川、遙かな山々の眺望を楽しみつつ、磁石を取り出し地図を広げて



根上がりのヒノキとヒメコマツの元で

白髪山は結晶片岩の白く光る石からなっているため白岬と言っていたが、後に白髪老翁姿の猿田彦命を祭る山麓の白髪神社にちなんで、白岬を白髪に改めたというのが白髪山の

翌年払い下げを認めた。その面積は四三、三四六町余りという。現在の高知県の国有林面積の実に三分の一強にも達する広大な面積だ。社員による奥山の伐出作業は困難を極め、

清遠 幸男(高知レポート5)	A5判 一二二頁	定価一、〇〇〇円
高知県の工業		
土居重俊監修 高知市文化振興事業団編	B6判 二二〇頁	定価一、〇〇〇円
土佐弁 土佐日記		
岡林清水著	四六判 二七八頁	定価一、八〇〇円
高知県文学散歩		
高知の文化を考える会編	A5判 一八八頁	定価一、二〇〇円
高知の文化を考える		
高知市文化振興事業団編	A5変 二二四頁	定価一、二〇〇円
わがまち百景		
高知県緑の環境会議森林研究会編	B5変 二三八頁	定価二、五〇〇円
高知の森林		
筒井広道著	A5変 二五六頁	定価二、〇〇〇円
画帳の歳月		
上森千秋著	A5判 二四〇頁	定価一、五〇〇円
流れと波の科学		
土居重俊著	A5判 一一八頁	定価一、八〇〇円
土佐日記 (付方言土佐日記 全訳注)		
土居重俊著	A5判 七三六頁	定価六、〇〇〇円*
高知県方言辞典		
高木啓夫著	B5変 三四六頁	定価四、八〇〇円*
土佐の芸能		
清水孝之著	A5判 三三二頁	定価三、八〇〇円*
中山高陽		
外崎光広編	A5判 三四四頁	定価三、〇〇〇円*
土佐自由民権資料集		
今井嘉彦著(高知レポート2)	A5判 一〇八頁	定価一、〇〇〇円*
河川はよみがえるか	A5判 一五六頁	定価一、〇〇〇円*
外崎光広著(高知レポート4)	A5判 一五六頁	定価一、〇〇〇円*
土佐の自由民権運動		

*は税抜き価格です

授産資金捻出どころではなく、明治十年には政府への買い上げを懇請する有様となり、二年足らずで土族の山林経営は行き詰まったと言う。

ところで明治十年といえ、西南戦争の時である。立志社の拳兵派は西郷軍に呼応して武装蜂起を企て、この山林の売り払い代金を銃器購入費に当てる手筈を整えていた。政府はその意図を見抜いて支払いに応ぜず、政府の弾圧、さらに西郷軍の敗退により、この計画は頓挫した。そして立志社の言論活動はさらに活発となり、自由民権運動は全国に波及していった。この問題となった山林をほとんどの歴史書は白髪山の名前で記述しているのである。

同じ明治十年、弾圧後に創刊された機関誌「海南新誌」に掲載された自由民権運動の発祥の地を宣言する「自由は土佐の山間より発したり」という植木枝盛の言葉はモンテスキューの「自由はドイツの深林中より芽出せり」になぞらえたものという。植木の言う「土佐の山間」とは、具体的には立志社が自由民権運動の経済的基盤にしようとしていた、白髪山を含む四万三千ヘクタールにも及ぶ森林が念頭にあってのことではなかったかと、私は思うのであるが、どうであろうか。

(高知大学農学部助教)

お申し込みは最寄の書店が事業団まで

孤立をえらび取る

片岡 文雄

文化の定義がおぞましいまでに錯綜し、多様化し、なによりも大衆化し、その分あいまいさが黙過され、おびただしい享受者とわか啓蒙家を生み出している現状を、あなたは どう思われるだろうか。それと故郷高知でのいっさいの創作集団に属さず、創作活動を続けている私に、こうした状況にたいして何をどのよう に発言してよいものだろうか。

文化に関わる集団や組織の論理と行動への提言ということになれば、右にふれた私自身の立場からすると傲慢にすぎない。そうした私に許されることは、ではなぜこうした孤立の立場をあえて選び取っているのか、その事情や理由をここに開陳し、私自身のありかたの是非をも問うということになろうか。これは、創作の主体は依然として個人にあるということ を前提にしてであることはいうまでもない。したがって、私のいうところは多数者への恰好の材料を提

供するということにはならないだろうし、ごく少数の方の内面のどこかを刺激するという程度のものかもしれない。

これははつきり言っておかなければならないが、今日の文化の大衆化現象のなかで、多くの人々が錯覚していることの一つに、個々の人間が何ごとによらず発言し、それが万人に裨益するものだという提言者自体の無意識の錯覚があるということ。自らの道程をかえりみていうことになれば、そうした万能ぶりは妄想にすぎないことがわかるはずである。

私は詩作を中心に、今日に至る四十年間文学活動を続けてきた。当時 は就職難の時代であったが、高校を卒業した年に辛うじてしがみつくと ので高知市役所の臨時職員の仕事 を一年かぎりで捨て、東京に出ることにした。どうぞ高知にふみとどまってコメ代を家に入れてくれと泣いて押しとどめる母を振り切つて、

う。その子らの今や過半数が欠親者 といった家庭での不幸を背負わされて いる。そういうことのハンディが 学習や生活にひびいていること、こ れをどう社会全体が受け止めるのか ということは置き去りにされたまま だ。

藤村の述懐ではないが、生まれ、 生きていく者には、なんとかして生 きていく手だてが要る。エリートた ちにはその豊かな知力を祝福し、さ らに高度のそれを身に体してもらい たいと願うものだが、人間社会に生 きる者の大多数はそうではない。知 力と機会にめぐまれた者は、おのれ の身に体したものを多くの人々のた めに分かつ心と熱情を持たなくては、 これは一人前とはいえない。ソクラ テスの言をもじれば、おのれが生き ることへの熱中と充足でなく、どの ようにおのれの能力を人々に分かっ



鏡川橋下流の北岸で(昭和44年) ~島総一郎写真集 高知・失われた風景より

た。暗がりにある人間の心を 忘れないこと、これは同時に私の文 学の課題ともなるものだった。人間 はすぐに思いつく。ひとの悲しみ やすすり泣きから無縁であろうとす る生きものだ。他人ではない、おの れがそれである。そのためには自己 に強いる何かがあつてもやむを得な い。そういうおのれのためな人間と いうよりは、すべての人間に潜むだ めなものに抗することを課題として、 私はどうやらこの職業の終りを二年 後に迎えられそうである。ただ、わ が妻子には夫、父親不在のかげりを 投げかけてもきた。これは許しても らうよりない。やり直しはきかない のである。

経済的利益追求とその優位にたつ ための先行現場となることを、今日 の教育ほどむき出しにしている時代 はない。先を争ってエリート校をめ ざし、それに手の届かない多数者を 愚民あつかいして、大人も若者も歯 止めがきかなくなっている。わが高 知においてもこの弊をまぬがれては いない。この五、六年顕著になつて きたのであるが、定時制高校の門を くぐってきた若者たちのほとんどは、 全日制昼間の高校の門前払いをされ た者である。学習能力においておく れがある、中学までの生活の疑念が 持たれて、という判定によるのだら

東京に向かったのは一九五三年(昭 和二十八年)の春だった。父は一人 前に稼ぎのできる人でなく、私を含 む子ども四人の暮らしを、まだそれ ほど人々にゆとりのない時代に、和 裁で母が乗り切るには至難というよ りは不可能であった。臨時職の日給 百八十円、月に五千円足らずの手取 りのうち、私は四千円を母に渡して いた。それがゼロになる。私は心を 鬼にした。

私の意志が変わらないのを見届け ると、母は決然タンスの底に残つて いた着物三枚を全部処分し、十九歳 の私の東京行きの旅費とした。出発 当日、ことごとく反対していた伯母 と叔母の三名も母と共に高知駅で見 送りしてくれた。

あれから四十年、私に鮮明になつ てくるのは、あの心を鬼にすること と人の愛という全く矛盾することを、 人間が何かを突破するには同時に受 け容れざるを得ない、ということであ る。悲しいことではあるが。

私はこうして両親や姉弟を高知に 残し、奨学金とバイトで大学をおえ た。もちろんん仕送りはないから、歩 行不能となる栄養失調、何度かの高 熱を発してバイト先のトタンで囲つ た資材置場の二帖切りの部屋でもう 今度で終りだろうか、という無残な 数年をおくった。

のが肝心である。

教師としての私は、どれほどの学 識と人格性をもそなえているわけの ものでもない。ただ、背水の陣にあ る若者の間にうずくまり、そのうめ きやすすり泣きの心を共有すること で、私はかろうじて自分の人間であ ることを取りもどそうとしているの である。自分が、まっとうな人間で あるという前提条件などというもの はない。人間が人間でなくなること、 逆にほんのかすかではあるが、人間 である自分に立ちかえること、これ が私の教育の現場に身を置く現状で ある。中島敦の名作「山月記」で、 もはや虎から人間に立ちもどること が絶望的となつていく詩人李徴の心 は、私のものだということを思いも するのである。

若い日の生きることの恥辱は今日 の私の心の糧となつているものだが、 東京での文学的出発におけるよき詩 友や多くの書からの恩恵をも忘れて はいない。肝心なことは、この高知 で私が生活し文学をする精神はどう あるべきかをおもえば、右に記して きたことどもということになる。キ ンナ言いかたとなつて意にそわない が、私の帰郷は四十年を要して、実 質は右の心への帰還を意味していた ものようである。

(日本現代詩人会会員)

若い頃はともかく、こうした生い 立ちの屈辱は決して忘れまいという 想いが、私の生きていく上でのスプ リングボードになつていく。島崎藤 村が、「自分のような者でもなんと かって生きたい」ともらしたその心 が、私には分かるような気がする。 自分のたどつてきた道程での恥辱と いうものは、だれしも忘れない。た だ文学する者には、これがおのれの ことだけではなく、人をして人たらしめるものであることを見ずえる必 要がある。ギリシャの大哲学者ソク ラテスがいったという「生きるとい うことが大切なのではなくて、善く 生きるということが大切だ」という 意味において、文学する者いや文学 を続ける者は、人それぞれにとつて の屈辱の姿を見ずえなければなら ない。人間にとつての誇りとは何かを 同時に裏返して考えるためである。 私は趣味で文学をやっているのでは ない。

ところで、帰郷後三十六年間にわたつて私は公立高校の教員をして いる。はじめの十年間は全日制高校勤 務だったが、そのあと現在に至る二 十六年間は連続して夜間定時制高校 に勤務している。これは私の希望で あり、生きる場をつとめて底の方に 求める行為である。偽つて自分を幻 想の高みに置かないための手だてで

原稿・カットの募集

「文化高知」の原稿・カットを募 集します。

■原稿の題材は自由です。内容は エッセイや提言、文化活動の紹介 など字数一五〇〇前後、ます目の 原稿用紙やワープロ打ちで一行十 六字。

■カットの画題は自由です。ハガキ に黒がきでかいて下さい。 いずれの場合も、住所・氏名・ 電話番号(または連絡方法)を明 記して下さい。採用分には、薄謝 を差し上げます。

■なお、原稿の返却は致しません ので、ご了承下さい。

〒780 高知市本町五十一二二三
(財)高知市文化振興事業団
TEL&FAX 〇八八八一七三三四三六五

市民フロアのご利用を

広さ:内装 96㎡、壁面布クロス張り、 スポットライト完備
所在地 高知市はりまや町一五 ー一ー
デンテッターミナルビル 5F
申し込み 高知市本町五十一二二三
(財)高知市文化振興事業団 に申込書を提出下さい。

津野山文化の 貴重な語り部

梶原町立歴史民俗資料館

古くから津野山郷とよばれ、そこに独自の生活・文化・歴史をきずいてきた標高四一〇メートルの山間のまち梶原町に、県下でも有数の「町立歴史民俗資料館」がある。

もともとこの津野山郷は、延喜十三年（九一三）伊予より入国した津野経高が開拓した津野荘に起源をもつといわれ、山間僻地の同地における人々の暮らしを支えてきた道具の数々も、長い歴史の中で経験と工夫により、見事な機能や材質の調和をつくり出し、保存されている一つひとつに、山間の厳しくもやさしい自然と共に暮らし続けてきた人々のぬくもりさえ感じられる。

こうした先人の残した遺産を守り継ぐと、昭和三十七年、町に文化財審議会が設置され、町内における文化財等の調査が始まっている。

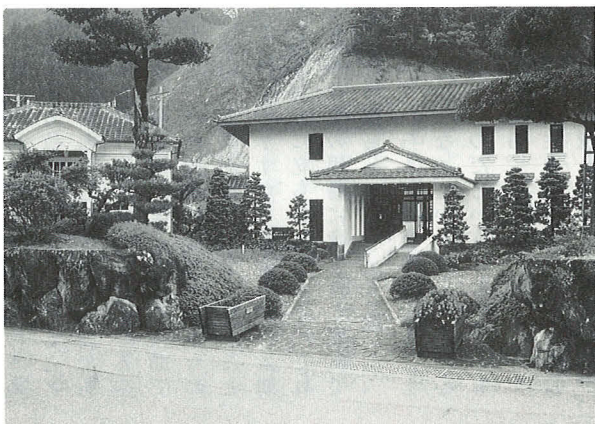
そしてこれらの活動の一つとして、翌昭和三十八年から審議委員が中心となり、町内全域から考古・歴史・

民俗にわたる資料の収集をはじめ、町内沢山の方々からの寄贈によって、旧役場庁舎（明治二十四年建築、当時流行の洋館造りで、現在も歴史民俗資料館の別館として活用されている）を「郷土史館」としてオープンさせた。

その後、収蔵資料も四千点を超えたことと、館の老朽化の問題もあり充実した施設の必要性から昭和五十二年十二月、「歴史民俗資料館」を町の中心地である現在地に建築、さらに昭和五十四年二月、山手の庄屋敷跡にあった「郷土史館」を別館として同じく現在地に移築して、今の装いとなった。

本館は日本瓦に白壁造りの落ち着いた和風、その横に並んだ年輪を感じさせる洋風の別館は、いかにも好対照である。

いずれも二階建て、特に本館は中庭を中心にして設計されており、展示資料にひき込まれて観覧している



梶原町立歴史民俗資料館

と、いつの間にか一巡して元の位置に戻っている。

県下においても、「歴史民俗資料館」は数多く設置されるようになってきたが、当館はこれらの先がけといつてよく、現在の一万点余の収蔵点数、また、「津野山文化」の名残りを伝える民具類の数々は、他に誇るべきものといつてよい。

特色をあげれば、山地での生活・作業用具の種類の多さであろう。

また、長年の生活の知恵は「津野山式」の用具を開発している。

傾斜地の多いこの地にあつては、その状況に合った「鋏」の考案、木

材運び出すのに木馬きまが使えない場所では「なかもちげた」、「なかもちつえ」といって人力でかつぎ出す時に使った用具、冬期雪積道を歩いたり狩猟に行く時重宝がられたワラ製の「雪ぐつ」、また直径七、八十センチはあろうかと思われる木材をくり抜いた桶、さらに異様に写ったのは、百姓一揆の武器ともなった「おごなわ」……

宝暦年間の津野山一揆と、これらにかかわった村人や大庄屋中平善之進の激動の時代が脳裏をよぎる。

この他、長い時代にわたってこの地の自給自足の生活を支えてきた「のこぎり」や「鋏」類の種類の多さに目を奮われる。館内の案内をされている成岡毅さんは、郷土史に対する造詣が深く、津野山郷にまつわる話や一万点余にのぼる資料類の説明は実に詳しい。

平成三年度の利用者は延べ二、四一一名。かつては「陸の孤島」といわれたこの梶原町も、途中の難所「布施ヶ坂」に新道が開通し、町内外の人々の交流もますます盛ん。

資料館は、町外にひらかれた貴重な施設として、今後も一層の期待がかかっている。

紀子旧跡に立ちて

岡林 清水

車で行けば、後免の町から領石に通じる道を北へ走り、国分小学校の手前で右折し、小学校南側の道を三百メートル東へ進むと、三、四十メートル南に小園が見えてくる。森というには、木が少ない。公園というには少し狭すぎる。

この辺りが、千六十年あまり前の土佐の国守、紀貫之が、その任期中住んでいた処である。貫之は、延長八年（九三〇）一月、京都から土佐の国に來任してより、四年有余この地に住み、承平四年（九三四）十二月二十一日、国府を出生した。

その後、代々の国守が住んでいる間はよかつたが、戦国時代を経て、江戸時代も半ばを過ぎると、貫之の館のあとは、全く荒れはて、田野と化してしまふような状態となつていった。

土佐藩政時代の文人政治家尾池春水（一七五〇—一八一三）は、この地の荒廢を惜しみ、京都の日野大納言資枝の和歌を乞い、土佐の九代藩主山内豊雍の「紀子旧跡碑」の篆額を得て、寛政元年（一七八九）二月、この地に、「あふぐ世にやどりしところ末遠くつたへむためとのこすいしぶみ」の碑を建てた。裏面には、清原宣條の三百字に近い漢文の撰文

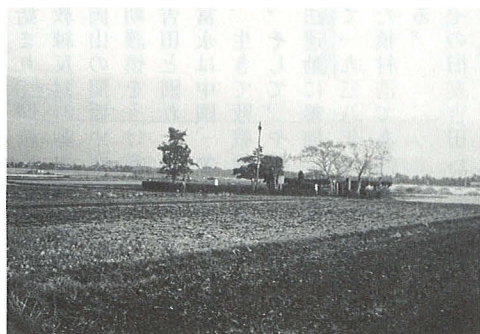
（一七八五年五月記す）を載せた。源家具の書である。その文中で宣條は、「貫之は：土州刺史たりし時に幸いにも無為」と記している。

国府の土地で、貫之は政治面では無為であった。だが、これは悪口ではない。老荘の道で、もつとも大切にすることは「無為」で、貫之の四年間は、この道にかなつたものであつた。何にも目立つことがなく、無為というのには、貫之の在任中、土佐の国が平穩無事だつたことを示すものである。

政治面では無為のなかで、貫之は、みやびの道で、「新撰和歌集」の編纂を完了していた。古来の和歌のなから優れたもの、つまり「花実相兼」の「玄之又玄」の歌を選び出し、「春・秋」「夏・冬」「賀・哀、別・旅」「恋・雑」の四軸に分けたものである。

貫之の土佐での文学的業績に、「新撰和歌集」の編纂・作成のあることを、案外見逃している人は多い。かの有名な「土佐日記」は、貫之が承平五年（九三五）二月十六日の夜ふけに京都の富小路の自宅に帰りついで後の作品である。

だが、近代の文人たちは、「土佐日記」のみやびを慕い、この地に足



紀子旧跡の小園を望む

平成元年（一九八九）十月には、貫之の歌碑がこの地に建った。除幕式の日、求められるままに、「秋天に紀子のおもかげ顯ちくるも」の拙句を記したことだつたが、いま、紀子旧跡に立ちてば、かつてこの地を訪れた人たちのおもかげを通して、時の流れが逆しまに戻つてくるような心地になる。

（高知大学名誉教授）

高知の出版

浜田清次・堀見矩浩編

「新訓山齋集」(上・下)

小関清明著
「鹿持雅澄研究」

鹿持雅澄先生生誕二百年を慶祝するにふさわしい立派な書物が刊行されたことは、まことに意義深いことである。『新訓山齋集』上下二冊(浜田清次・堀見矩浩編)と『鹿持雅澄研究』(小関清明著)である。山齋集は雅澄の家集である。底本には、山本修三編『山齋集』(明治四十一年刊)を用いている。上巻は一、三二〇首のうち、万葉仮名で表記されているもの一、二〇九首。下巻の三六六首(うち長歌一九三)も多くは万葉仮名で表記されていて読解は容易ではない。若くして万葉集の研究に打ち込まれた浜田氏は雅澄畢生の書である「万葉集古義」にもとづいて山齋集を読み解き、訓点を施し、『訓点山齋集』上下(昭和五十三、五十四年刊)を世に出された。万葉集研究における仙覚の新点に比すべき偉業である。この訓点山齋集に心ひかれた気鋭の教え子堀見氏

のひたむきな精進努力、いわば師第一の作業で『新訓山齋集』は成ったのである。

万葉集が白文万葉集と訓点万葉集と新訓万葉集と歩みすすんで万人の万葉集となったように、新訓山齋集は我々現代人のもの、親しみ易い山齋集となったのである。この功績は大きい。

なお、表記について一言すれば、下巻の長歌は一行を五・七の二句のみとしたことよって非常に読み易くなっている。沢瀉博士の「万葉集注釈」の表記の良さを積極的に取り入れておられ、好感が持たれる。

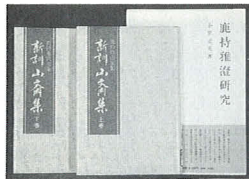
鹿持雅澄研究の第一人者である小関清明氏の五十有余年の研究の結晶『鹿持雅澄研究』は、待望の書であった。著者は伝記的研究、研究と著作、家系の三部に分けてまとめられ、年譜を付されている。教えられるところ多大であるがその一部についてふれてみたい。

伝記的研究の中で雅澄の没年月日を安政五年九月二十七日と断定された点である。鴻巣集雄氏は「鹿持雅澄と万葉学」の中で八月十九日死亡説をとり、九月二十七日は陰陽両暦の差であろうと片付けて

いられるが、小関氏は雅澄の日記が安政五年九月二十一日まで記されているのを根拠に、明快な判断を下されたのである。

研究と著作の中では、雅澄の万葉集研究は、注釈的研究を主とするものであったと記し、「年とともに内容を充実させ、その注釈の中に芽を吹いた古語古歌の格の認識は、やがて附巻の諸書として実を結んだ。それらを併せて『古義』は、近世万葉学の掉尾を飾るにふさわしい大著となったのである」と論じて、高いそして正当な評価を示されている。

家系の部での、『飛鳥井家譜』作爲説批判は、鴻巣集雄氏の『飛鳥井家譜』は雅澄の作爲したものという説を、証拠をあげて論破したものである。この書は氏の人柄そのままに誠実で手堅い良著である。(上代文学会会員 森下幸男)



富永 三雄著

「ひとつつの出会い」

— 貴重な植村浩回想 —

旧制中学海南学校はスバルタ教育で知られた軍人養成学校だった。そこへ一九二七年、土佐中学から神童と騒がれた吉田豊道が転校してくる。やがて吉田の軍国主義教育への反抗が始まり、同級生の富永は吉田と軍事教練反対行動をとる。吉田は岡山の関西中学へ追われ、富永も無期謹慎をうける。

吉田と別れた十年後、戦争は拡大し富永は中国、マニラ、ジャワを転戦、生きて敗戦後の高知へ帰ってくる。そして、やがて旧友吉田が、非合法運動に参加、反戦革命の詩人として一九三八年、二十六歳で世を去った植村浩であったことをはじめて知る。

その旧友吉田への驚きと敬愛、中学時代の反軍思想に徹した姿と友情をリアルに今日につないで伝えている。詩人植村浩の貴重な回想である。ほかに「一兵卒のノート」「随想」も収載している。

「ひとつつの出会い」刊行委員会刊 (猪野 睦)

第8回高知の映像コンテスト入賞作品



清岡 義道

月の瀬橋

高知を撮る

「主人と言わずに夫と言おう」というスローガンを掲げたのは、一九五五年に開かれた第一回日本母親大会であった。随分早くからそのことが運動となっていたことを知るのだが、それから三十数年たったいま、どうなっているのだろうか。

首都圏の勤労女性を対象としたNHKの調査(一九八六年)によると、結婚した相手を他人に紹介するときの呼び方として、「主人」と呼ぶのがやはり一番多くて三十四%である。多いと見るか少ないと見るかは、人によって異なるが、約二十年前の雑誌「言語生活」の調査では、「主人」が一六八人中一八八人中八〇%近くあった。

次点は「夫の姓」で、「夫だけじゃなかったの三人だったから、「主人」派が減ってきていることは確かである。

家庭における役割分担も、ここ三

役割交代



風俗歳時記

十年に大きく変わった。いまでは夫が台所の手伝いや育児の分担をすることは当然になった。求められる家庭像も「役割分担型」「夫婦自立型」へと変化してきている。

こうしたことが家庭における役割に影響を与えないはずがない。ととうとう教科書の挿絵にもその変化があらわれた。一九九二年度本をみると、挿絵に夕食の後片付けをする父親が登場したり、いままではジョギングをするのは父親、掃除をするのは母親だったのが、そっくりその立場を入れ替えたもの、ちゃぶ台を囲んで家族が団欒する風景に、新聞をひろげる母親の姿が描かれるなどである。

またこれまでエプロン姿のめだつた女の子が、力強くボール投げをしたり、虫メガネを覗くシーンも描かれるようになってきた。「主人」という呼称が死語になる日も遠くなるだろう。(晋)

より良い保育をめざして

出原 直子

「より良い保育をめざし、保育者自身が生き生きと活動し、何より子どもや保育者の気持ちを歌うことを大切に」と、一九七五年に結成されました。現在サークル員は二十名ならずで、保育所や幼稚園、施設、乳児院と勤務先は様々です。サークル独自の活動としては年一回、サークル員が創作した劇や踊りの数々、合唱、会場の皆さんとの手遊びやゲームなど、親子連れで気軽に参加できるファミリー的なコンサートを定着させてきました。

一方、全国や県下のうたごえサークルとの交流にも取り組んでいます。



各県持ち回りの全国保母のうたごえ祭典にも代表を送ったり、一九八五年には保育王国といわれる層の厚い保育運動に支えられながら、第十四回祭典を高知で開催することが出来ました。また、県下においては、高知空襲展と連携しての反核平和コンサートにも取り組んでいます。

写真って素晴らしい

尾崎 和子

フォトサークル・フレンドは、中央公民館の市民学校で学んだ仲間達を中心に、なつてつくった、初心者ばかりのサークルです。足立して二年目ですが、メンバーは十数名、若者から年配まで幅広く、とにかくみんな写真の好きな者達ばかりの集まりです。写真のことがなるとみんなまでワイワイ賑やかに話し合うのもサークルならではの味わいです。

ところで「写真って難しいからイヤだ」と思っている方も多く、最近のカメらは軽くてとても使い易い、操作が簡単になったし、オートフォーカスも以前より随分性能が向上し、女性でも気軽に使いこなせる時代になってきました。私も女性ですが、大半を占め、華やかな中で楽しく撮っています。

素人ばかりなので、講師の先生にお願ひし月一〜二回の撮影会、その後では



能楽囃子に魅せられて

葛目 雄三

高知能楽囃子友の会は能楽唯一の旋律楽器である笛を中心に、それと密接な関係にある太鼓、大鼓、小鼓の打楽器と、それらに囃されて謡われるいわゆる囃子謡を稽古する会として、昭和五十五年に設立された新界では比較的歴史の新しい会です。会員はそれぞれが日常の余暇に個人的に各パート毎の稽古をしています。が、楽しみだから、素人だからといって、間違いは許されませんので、定期的に専門家の指導を受けながら運営されています。

会の特色は常に笛の実技が見聞出来ることろにありませ。通常、鼓類の舞事の稽古は師匠の口直しによる唱歌によってなされますが、笛方の常駐している当会では折にふれ、機に即して笛の音色を耳にする事が出来ます。

今一つの特徴は会員制による流派不問の囃子事、舞事の自己研修と交流の場として囃子同好会を主催している事です。



寒蘭をあなたに

田口 福宏

寒蘭は、その形態や性質から、文人思想に共感するものがあり、古くから古典園芸植物として珍重培養されてきました。なかでも土佐寒蘭は全国に類を見ないような貴重な存在で、多くの愛好者を魅了しています。

土佐寒蘭の魅力は花や葉に冴えがあり、他に類を見ない桃色・黄色・純白色の花をつけるものが集団で自生し、花色が多彩なことがあげられます。

郷土の先輩愛蘭家が、土佐の特産品である寒蘭の品種を保存しなければ優秀な品種が絶滅してしまう危機感を抱き、昭和五年頃から展示会を開いて普及に努め、昭和八年に土佐愛蘭会を結成し、会誌を発行して寒蘭の品種保存及び普及発展に活動を開始しました。



保母のうたごえ「メリーゴーランド」

「より良い保育をめざし、保育者自身が生き生きと活動し、何より子どもや保育者の気持ちを歌うことを大切に」と、一九七五年に結成されました。現在サークル員は二十名ならずで、保育所や幼稚園、施設、乳児院と勤務先は様々です。サークル独自の活動としては年一回、サークル員が創作した劇や踊りの数々、合唱、会場の皆さんとの手遊びやゲームなど、親子連れで気軽に参加できるファミリー的なコンサートを定着させてきました。

「フォトサークル・フレンド」

フォトサークル・フレンドは、中央公民館の市民学校で学んだ仲間達を中心に、なつてつくった、初心者ばかりのサークルです。足立して二年目ですが、メンバーは十数名、若者から年配まで幅広く、とにかくみんな写真の好きな者達ばかりの集まりです。写真のことがなるとみんなまでワイワイ賑やかに話し合うのもサークルならではの味わいです。

「高知能楽囃子友の会」

高知能楽囃子友の会は能楽唯一の旋律楽器である笛を中心に、それと密接な関係にある太鼓、大鼓、小鼓の打楽器と、それらに囃されて謡われるいわゆる囃子謡を稽古する会として、昭和五十五年に設立された新界では比較的歴史の新しい会です。会員はそれぞれが日常の余暇に個人的に各パート毎の稽古をしています。が、楽しみだから、素人だからといって、間違いは許されませんので、定期的に専門家の指導を受けながら運営されています。

「土佐愛蘭会」

寒蘭は、その形態や性質から、文人思想に共感するものがあり、古くから古典園芸植物として珍重培養されてきました。なかでも土佐寒蘭は全国に類を見ないような貴重な存在で、多くの愛好者を魅了しています。

す。特に、第九回を迎えた今年の平和コンサートでは、「三歳未満の障害児も保育所に入れて欲しい」という、坂本のぞみちゃんを人ささせる運動を取り上げ、福祉職場に働く多くの仲間と共に「よかつたねのぞみ」という歌を創作しました。これからは、「子どもにとって良い文化を」、「子どもや保育者の願ひに寄り添った活動を」と、更に多くの人たちとの連携を深めながら、粘り強く活動を続けていけたらと思っています。

連絡先 高知市長尾山町四〇一二二
電話 〇八八八四〇一七三七

必ず出来上がった作品の合評会を開き、先生を囲んでの意見交換を行うことにしています。自分には新しいものの発見や、今まで気付かなかった心の広がり等、写真はただ撮って記録に残すだけでなく、いろんなものが見えてきます。想像も広がります。

連絡先 高知市知寄町二二二四一
電話 〇八八八二一八一八

能楽界にあつては流派の別は誠に厳しいものですが、囃子方ほどの流派ともお相手が出来ますので、毎週土曜日の午後一時〜五時まで高知市筆山文化会館で稽古会を開催しています。

連絡先 高知市長浜八一六
電話 〇八八八四一三〇七三

を待ち、独特の孤高な葉姿や花姿を鉢植えで愛でるものです。

連絡先 土佐山田町楠目七二二
電話 〇八八七五二一五七六六



散歩の途中で

江山の北、高坂橋北詰を東へ数メートルの所に、大川筋火力発電所跡の碑がある。明治三一年四月、高知最初の火力発電所がここに設けられ、旧高知市内および江ノ口・旭・下知村の一部に電柱20本を立て、5キロメートルに亘って川の電灯を点燈させた。それから僅か100年、東京のみならず全国で「眠らぬ街」が増えていく。

風伯

「主観と客観」

「高校野球としてフェアか否か、例の5連続四球をめぐる論議である。この問い掛けには二つの尺度を必要とする。「野球(ルール)としてどうか」という尺度と「高校(生)としてどうか」という尺度である。前者については「ルールブック」というプロ・アマ共通の「客観的」で明確な尺度がある。要は四つのボールを並べて塁を与えるのも、三つのストライクを揃えてアウトにするのも全く自由である。明徳はそれに従ってプレーしたのであるからフェアであったのだ。

問題は後者である。が、これには明確な尺度がない。あるとすれば各人の高校生観

という「主観的」尺度である。そうだとすると星稜ナインに同情を寄せるとは大いに許されても、明徳チームを声高に非難することは「主観的」な行き過ぎであり、独りよがりと言わなければならぬ。

試合を中断させた観客のルール違反を咎めずして、群集心理に迎合し競技スポーツの基本である「勝とう」とする態度と意欲を問題にしたのである。「朝日」と高野連は競技に打ち込む少年に何を求めようとしたのか。(寸角)

泣いた笑った怒った。

あふれる勇気と、燃える恋…。

土佐の題材・県民参加のオリジナル作品

ミュージカル

津野山物語

高知公演 10/24 (土) pm. 6 : 00 開場 *託児所有り

高知県民文化ホール・オレンジ 6 : 30 開演

梶原公演 10/31 (土) pm. 5 : 30 開場

梶原町北町公民館 6 : 00 開演

○入場料 2,000円 (前売り・当日とも、全自由席)
～市内各プレイガイド、事務局で発売～

○主 催 ミュージカル津野山物語実行委員会
(財)高知市文化振興事業団・梶原町

○お問い合わせ (財)高知市文化振興事業団 ☎0888-73-4365

文化セミナー'92

「子どもと家族の社会学」

子どもが成長してゆくうえで、最も基礎的な社会集団としての家族の役割が大切であることはいうまでもありません。

しかし、現代の家族はしだいにその機能を失い、家族間の断絶や、子どもたちの問題行動など様々な問題をかかえています。

いま、子どもたちに本当に必要なものはなにか、親子にとって家族とはなにか。地域社会との関係もふまえながら、家族の果たすべき役割と意味を考えます。

◇10月12日 (月) 午後1時30分～ 会場：高知共済会館 3階ホール
『子どもの世界と社会・自然』(仮題) 講師：藤本 浩之輔 京都大学教授

◇10月29日 (木) 午後1時30分～ 会場：オリエントホテル高知 2階ホール
『現代社会と家族の未来
-家族は崩壊するか-』 講師：川本 彰 明治学院大学教授

◇11月6日 (金) 午後1時30分～ 会場：高知共済会館 3階ホール
『親子関係の危機と克服
-どうつくる心のきずな-』 講師：稲村 博 筑波大学助教授

参加費：500円 定員：申込先着100名

— お申し込み、お問い合わせは文化振興事業団まで —

財団法人 高知市文化振興事業団

〒780 高知市本町5丁目2番3号

TEL (0888) 73-4365
郵便振替 徳島 8-14869